〒108-8414 東京都港区芝5丁目26番20号
電話 03-3456-2051 ファクシミリ 03-3456-2058

社団法人日本建築学会
ARCHITECTURAL INSTITUTE OF JAPAN

26-20, Shiba 5-chome, Minato-ku, Tokyo 108-8414
Phone 03-3456-2051 Facsimile 03-3456-2058

2007年8月29日

海老名市温故館についての見解

社団法人 日本建築学会関東支部
建築歴史・意匠専門研究委員会
主査　　大橋　竜太

海老名市国分南1丁目19番36号に所在する海老名市郷土資料館「海老名市温故館」は、海老名村役場庁舎として1918年（大正7年）に竣工している。開庁式は同年4月3日に行われており、これを4月5日付けの「横浜貿易新報」紙が報じている。1940年（昭和15年）の町制施行とともに海老名町役場となり、1966年（昭和41年）の新庁舎完成以降は、海老名町商工会議所として用いられ、さらに1982年（昭和57年）以降、海老名市郷土資料館「海老名市温故館」として用いられ、今日に至っている。

温故館は、1921年（大正10年）、相模国分寺跡が国の史跡に指定されたことに応じて、史跡の出土品を保管する目的で同年に尋常高等海老名小学校校庭に設けられた施設の名であり、この初代の建物が関東大震災で倒壊した後、現在の温故館である村役場のそばに再建され、その後いくどかの移築を経て失われたが、かつての役場の建物を得て今日に至っているものである。したがって、村役場・町役場・商工会議所時代の海老名市温故館は近代の海老名の発展を示す最も重要な建物であり、また温故館時代以降は相模国分寺が置かれた古代の海老名の栄華と近代を結ぶ歴史的証人といえる。

海老名市温故館は、建築面積236.94㎡、延床面積416.26㎡、桟瓦葺き寄棟の屋根、ドイツ下見（一部イギリス下見）の外壁、木製サッシの上げ下げ窓、コンクリート布基礎（一部に石造基礎を残す）の木造2階建ての建物である。内装は、温故館に用いられる際にかなり改修されているが、階段室や柱等に当初の姿をとどめており、外観、特に玄関ポーチは非常によく創建当初の姿をとどめている。この建物は、郡役所や学校といった明治期に建てられた洋風の木造公共建築のスタイルを基本的には踏襲しており、むしろ明治期の建築に近いが、直線で構成されている玄関ポーチの意匠に大正期の新しい息吹を感じ取ることができる。

海老名市温故館は、海老名市内で最も古い洋風建築の遺構であるだけでなく、神奈川県内における数少ない関東大震災前の創建になる建物であり、しかも神奈川県内最古の地方庁舎の遺構である。この建物は近代海老名の象徴的存在であり、海老名の近代史に占める重要性ははなはだ大きい。

なお、この建物は、市役所所蔵建築資料や現状外観から判断して、外周部に1間（約1.8m）毎に15㎝角の通し柱を留め、外壁も多く、整形総2階の軸組構造（現状階段室は後設の可能性がある）は基本的に健全と考えられる。問題は、1・2階とも内部の当初柱と間仕切を撤去している部分が多い事である。ただし、内部柱と間仕切を復旧し、外周部の軸組構造を確認し必要な補強を講じ、床面の水平剛性を整えれば、十分構造面は改善されよう。また、その手法も様々検討可能である。